

「司馬遼太郎という作家は歴史の間に人を見いだす名人だった。その多くは作品によって世に知られるが、この人はあまり知られない。

「知名度の薄い、それでいて、これほど重要な人物は、ちよつといないのじゃないでしょうか」と高く評価した。宗教家で哲学者の清沢満之(1863-1903年)だ。「日本の名著 43巻」の付録対談「哲学と宗教の谷間で」にある。

くしくも、司馬さんの生誕100年の今年は満之の生誕160年。地元の愛知県碧南市で展覧会が開かれている。評価の「なぜ」を探ると、司馬さんの少年時代に行きついた。

異常な秀才

清沢は幕末に現在の名古屋、尾張徳川家の足輕の家に生まれた。司馬さんの評伝「清沢

山上直子

論説委員 日曜に書く

満之と明治の知識人」(中公文庫)二十世紀末の闇と光」などに収録)がある。

家が貧しかったため京都の真宗大谷派本山・東本願寺に学び東大の哲学科を卒業。「異常なほどの秀才」で大学院に進むが、恩義のある京都に戻り、京都府尋常中学の校長になった。三河(現在の碧南市)の西方寺

満之は宗門改革運動を起し、除名されたり、東京で私塾を開いて多くの仏教学者を育てたりと、わずか40年ほどの生涯を宗教と哲学に専心した。

親鸞と哲学

「満之を広く一般に紹介したのは司馬遼太郎とっていいでしょう」というのは、「司馬遼

宗という民間に根ざした、比較的高級な信仰が、彼によって近代思想に耐え得るようになった(中略)。思想家としては大きい」と述べている。座談会が掲載された「中央公論」(昭和40年4月号)に同時に掲載されたのが先の評伝だ。

そこで「清沢が出、清沢がこの日本人の精神的形成を、世界

司馬少年に蒔かれた「たね」

の娘と結婚、真宗大学(現大谷大)の初代学長などを務めた。ひ孫にあたる同寺の清沢聰之住職は「宗教哲学という分野を創った偉大な人。宗教界では知られていますが、派手な土地柄の地元では堅苦しいと好かれませんでした」と苦笑。境内に清沢満之記念館を開設し、貴重な史料を公開している。

太郎と浄土真宗(令和元年)などの論文がある真宗大谷派教養研究所の名和達宣さん。「中央公論社創業80周年の記念特集座談会で『近代日本を創った宗教人10人』に強く推したのです」。神道の千家尊福、キリスト教の植村正久らと並んでの選出だった。

座談会で司馬さんは「浄土真

規模のなかで行うにおよんで、はじめて知識人は親鸞の存在を知った」と書いている。「明治のインテリたちが、満之によって浄土真宗を、そして(宗祖の)親鸞を知ったのです」(名和さん)。満之は、自身が学んだ西洋哲学の手法で親鸞に迫ったのだ。

研究所員所員は、満之は英語に通じ東大で哲学を、大学院で宗教学を専攻し、直に西洋哲学やキリスト教などの宗教について学び理解していたと指摘。「その上で学者ではなく宗教者の道を選び、信仰者として思索を展開できた」と分析する。そんな満之を司馬さんが知ったのは、実は産経新聞京都支局の宗教担当記者時代だった。

「歎異抄」に導かれ

当時、真宗大谷派の宗務局長だった晴鳥敏との出会いだ。満之の弟子でその功績を後世に伝えた一人。そして司馬さんを「師弟に誘ったのが、親鸞の言葉を弟子の唯円がまとめたとき

れる名著『歎異抄』だった。実家が門徒で、若いころから声に出して読むなど同書に親しんだ司馬さん。先の大戦で召集されたときにも持参したことで

知られる。後に「歎異抄をわれわれに受け渡した人は親鸞というよりも清沢満之で、しかも哲学になって受け渡されている」と語っている。

さらに仏教系の大飯・上宮中学での学生時代に遡る。ある日、司馬少年は国語の授業で「凡夫」とは何かと聞かれ「つまらぬ人」と答えた。さらに「だれのことや」と問われ「知りません」と答えると、教師は「つまりわれわれのことやな」と言った。先生もか、と驚く少年に、それを悟ったのが法然と親鸞であり「日本の歴史の中で、最も偉大な発見をした人」と教えたという。

これを司馬さんは、幼い頃に蒔いてもらった「かんじんな」とのたね」と述べ懐いた。家庭で学校で、いま必要なのはこういう「たね」を蒔くことだ。

(やまがみ なおこ)